

展の日本画部門は新旧両派の軋轢がはげしく、文部省は緩和策として大正元年に二科(旧派)、二科(新派)に区分して別個に審査を行うこととしたが、大正三年再びこれを一本化し、その際、二科制で大幅に増員した審査委員を削減し、大観もそれに含まれた。この措置は大分議論を呼んだが、大観はこれによって文展への対抗意識を燃え立たせ、また、彼に同調して下村観山も審査委員を辞し、安田鞞彦、今村紫紅らも文展を離れて美術院に与し、反文展、在野党として独自に公募展を開催することとなった。

開院式は天心の一周忌にあたる大正三年九月二日に行われた。当初の陣容は次のとおりであった。

経営者 横山大観、下村観山、木村武山、安田鞞彦、今村紫紅、
小杉未醒(以上同人)、辰沢延次郎、笹川臨風、斎藤隆三
賛助員 高田早苗、原富太郎
評議員 経営者と賛助員全員

院友は二十余名、研究会員は九十余名あった。院友のなかには西村青婦、勝田蕉琴、中村岳陵、筆谷等観ら東京美術学校卒業生もいた。研究会員中の野生司香雪も本校卒業生である。

大正三年十月十五日から十一月十五日まで文展と会期を同じくして日本橋三越で第一回日本美術院展が開催され、大観の「游刃有余地」、観山の「白狐」、武山の「小春」、未醒の「飲馬」ほか小品三点など同人の作と公募作の絵画四十九点および彫刻十四点が展示され大変な盛況であった。『東京美術学校校友会月報』第十三巻第六号も「全體を通覽するに、見るべきもの甚だ多く、新進研究の活氣作品に滿ち同院が再興第一回の展覽會としては成效に近きものとい

ふべく、他の展覽會に對して、院派の特色を發揮せり。」と賛辞を贈った。

⑩ 東京美術学校規程改正と制度改革

大正三年九月五日発布文部省令第二十八号により東京美術学校規程が定められた。

東京美術学校規程

第一條 東京美術學校ノ學科ヲ分チテ日本畫科、西洋畫科、彫刻科、圖案科、金工科、鑄造科、漆工科及製版科トス

製版科ヲ除キ各學科ニ豫備科ヲ置ク

第二條 東京美術學校ノ修業年限ハ豫備科ヲ通シテ五箇年トス

但シ製版科ノ修業年限ハ三箇年トス

第三條 各學科ノ學科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

(學科目及每週教授時數表略之) (「頁」学科課程「参照」)

學校長ハ臨時必要ト認ムル場合ニ於テハ前表ノ每週教授時數ヲ増減シ若ハ科外講義ヲ開クコトヲ得

第四條 卒業者ニシテ既修ノ學科ニ就キ更ニ研究セントスルモノハ研究生トシテ三箇年以内在學セシムルコトヲ得

第五條 各學科ノ學科目中一科目若ハ數科目ヲ選擇シテ學修セントスル者ハ選科生トシテ入學セシムルコトヲ得

(『東京美術学校一覽』從大正三年
至大正四年)

ここに図画師範科が除外されているのは同科には別設の「東京美

術学校図画師範科規程」「東京美術学校図画師範科卒業生服務規則」が適用されていたためである。

これにより次の制度改革が九月十一日より実施された。

一、図案科二部制

図案科を第一部（工芸図案）と第二部（建築裝飾）に区分し、それぞれ別途の教育を行うこととした。学校当局は明治三十二年度から年報において建築科新設要求を続けてきたが、その趣旨が認められて建築教育部門が第二部として独立したのである。九月十一日付で第一部主任に島田佳矣が、第二部主任に古宇田実が選ばれた。第二部は大正十二年に建築科として名実ともに独立する。大沢三之助は「図案科の回顧並に建築科のこと」（『東京美術学校校友会誌』第十九号皇紀二千六百年創立五十周年記念号。昭和十五年十月）の中で當時を回顧して次のように述べている。

私が本校に復歸しました其年の八月に正木直彦先生が校長となられたのであります。而して私が本校教授を拜命しましたのは、其翌年則ち明治三十五年の十二月でありました。其又翌年に古宇田實君が来られまして、愈々建築科としての地盤が固まつて來ました。而して明治三十八年に島田〔佳矣〕君に代つて、私が圖案科主任を命ぜられたのであります。斯くして明治三十九年に海外留學生を命ぜられ、同四十一年に歸朝しましたが、其間に於て岡田信一郎君が講師に、小場恒吉君が助教になられて建築部の方に活躍されてゐました。私が歸朝後は古宇田・岡田及び私との三人が交代に、教室制度の様な教授法を試みてゐましたが、私が宮

内省へ轉任した後は止められたのであります。私の宮内技師となりましたのは、大正三年でありまして、其後は古宇田君と岡田君とが共力して、専ら其任に當つておられたのでありましたが、聽て新たに森井健介君を教授として迎へることとなりました〔大正三年十月〕。これから後のことは、森井先生が却而精しく承知されてゐると思ひます故、唯其概略を述べて結びと致しておきます。抑々建築を本科とすることは、正木校長の豫ての計畫であつて、私の歐洲よりの歸朝を待つて愈々實行に取り掛らうと、其後度々御相談があつたのであります。新しく一科を設けることは、豫算其他に於て中々面倒なものであるため、文部當局との折衝意の如く抄取らず延引してゐた所、漸く軌道に乗た矢先に、私が宮内省へ轉任することとなり、先生に對して甚だ御氣の毒な仕儀となつてしまつたのであります。幸ひ古宇田・岡田・森井の諸氏がおられたので、御相談に與り、漸く其歩を進めておられたのであります。大正八年の頃、又々正木校長から私に本校との關係を、持つてくれないかとの御依頼があつたので、宮内當局の許可を得て、またぞろ本校の御厄介になることとなりました。彼此するうちに大正十二年になつて、やつと建築科獨立といふことになつたのであります。

二、製版科新設

学校当局が明治三十四年度より年報において要求を続けてきた製版科設置（四十四年度より「写真及製版科」設置要求に変更）が実現した。これは後述（次項①参照）の東京高等工業学校および同校附設職工徒弟学校製版部門の廃止と密接な關係がある。鎌田弥寿治

(当時本校教授。工芸化学担当) は設立の事情を『日本写真教育史』(昭和五十年。東京写真大学短期大学部出版部)の中で次のように述べている。

筆者は大正三年七月、学校の夏季休暇中、美術学校の正木校長から至急校長室に来てくれ、と呼びだされて、次のように命ぜられた。「誠に突然であるが、最近文部省で東京高等工業学校内の図按科とわが美術学校の図案科とを併合することが決定し、昨年三月から蔵前の図案科がわが校に移って来る。これは文部省ですでに決定したことであるから、当方から異議を申立てることは最早できない。そこであちらの図案科に現在、在学する生徒は当方の図案科と合併して、夫々授業を行なうが唯、困ったことには、蔵前の図案科には(製版特習部)というのが附属して居る。これも勿論、本校に移って来ることになるが、この科を教育することは本校内の君のやって居る工芸化学教室以外にはない。生徒の数も左程多数ではないから、是非頼む」というのであった。

私は驚いた。わが工芸化学教室では他日、写真科を新設したいという下心はあるが、「製版」の生徒を教育する積りはなかった。でも、これは校長の命令であるから青二歳教授の私がそれを拒絶する資格はない。それと能く考えてみれば、写真と製版は無関係ではない。他日は必ず製版印刷と写真は密接な兄弟姉妹になるであろうと心中に描きながら、私は校長に答えた。「御命令ならば致し方ありませんが、図案科の一部を私の化学室でやるのはあまり嬉しいことではありません、それよりは製版を図案科から切り

放し、製版科という科を本校内に新設して頂ければ、私は喜んで仰せに従います」と大胆に訴えた。

正木校長は辛い顔をしたが、このことが結実して、やがて美校内に「製版科」という新科が独立したのである。

これは写真科に先立ってのことで、わが校内に大正三年四月からできたのである。最初私はこのことをあまり歓迎しなかったのであるが、今となってみれば、これが非常に良かったことがわかった。これが翌年、写真科新設の援助者ともなりまた、現在の写真と印刷の関係からみても、ホントに幸運なことであったからである。

蔵前の製版特習部の先生として結城林蔵教授と伊東亮次助教との両氏が私の工芸化学教室に移動してきて、ここで私と共に新設製版科の先生を教育することになった。

製版科の第一回生徒募集は大正四年三月に行われ、応募者十四名中七名が合格した(試験等については640頁、カリキュラムは614頁参照)。はじめは工芸化学教室で授業を行なったが、大正三年中に工芸部校舎裏手の製造科教室の続きに製版科教室が新築され、同十年の東京高等工芸学校への移管までそこで教育が行なわれた。教師および担当科目は『東京美術学校一覽從大正三年至大正四年』によれば次のとおりである。

製版科主任教授

製版術、製版用写真実習、光化学、製版実習

写真術大意、写真実習、製版術、製版実習

結城林蔵

同

助教 伊東亮次

材料及び薬品学、化学

色彩学、印刷術

数学、物理学

化学、化学実験

化学

図案

絵画及び図案

教授 鎌田 弥寿治

嘱託 矢野 道也

同 笠原 留七

同 小柴 英侍

雇 鈴木 宮吉

教授 鹿島 英二

同 岡田 秀

これらの外に各科共通科目の修身、外国語(英語)、美学、体操があった。のちには森芳太郎(大正四年嘱託、同九年臨時写真科教授)が数学、化学分析等を教え、小林亀五郎(大正六年助手、同八年製版科助教)が製版実習を担当する。

主任教授の結城林蔵は明治二十二年以降陸軍省の陸地測量部や砲兵工廠の用務に従事し、同三十三年から東京高等工業学校に勤務。

同三十五年から同三十八年までドイツ、オーストリアに留学して製版術を学び、帰国後は本務の傍ら勸業博覧会や農展その他の審査員をつとめた。草光信成(大正五年西洋画科卒)は、

大正五年春頃、東京美術学校に藏前高工の寫真科〔図案科〕と製版科が合

併されてあつた當時、製版科の主任教授、結城林蔵先生が、西洋畫科在學々生の爲に、エッチング講義を一學期講ぜられた事がある。西洋畫研究の爲にエッチングを無視してならない熾烈なる主張であつたが、當時はポスト・アンプレッションの心酔末期でも餘り聴講の人が講義室に充たなかつた。中村研一君が丁度レ

ムブランド研究に没頭して居る時で、相當その趣旨に應じて小品佳作を擧げて製版學生の參考にもなつて居た様だつた。實技の指導は現高工藝の伊東教授であつたが、吾々のクラスでは清水良雄君始め第一美術の古澤兼三郎それから遠山教圓、宮地茂君なども聴講實習された様に思ふ。獨立の鈴木保徳君も居られた様な氣がする。〔下略〕

〔エッチング〕第四十二号。昭和十一年四月)

と述べており、結城と伊東亮次が西洋画科生徒のためにも一時期エッチングを教えたことがわかる。しかし、製版科の教育は機械製版、印刷を旨とするもので、折りから急速に高まりつつあつた創作版画運動とは無関係であつた。

三、予備科の各科分属

従来(明治三十八年改正)では、修業年限は予備科(一学期間)、各科一〜四年、各科卒業期(二学期間)の計五年間とされ、予備科生は「毛筆画実習」「木炭画実習」「塑造実習」「用器画法」「歴史」「外国語」「体操」を受講することになつていたが、今回この予備科が各科(製版科を除く)に分属せられ、各科ごとの予備教育を行なうかたちとなつた。

① 東京高等工業学校工業図案科その他の生徒の教育委託

大正三年九月五日発布文部省令第二十五、第二十七号により、本校は東京高等工業学校の工業図案科生徒(第一年より第三年までの五十四人(製版特修生を含む)、選科生十三人(同上)、研究生)と附設工業教